特集Ⅰ

社会的排除と家族

シンポジウム

「社会的排除と家族」

清水新二・宮本みち子

要 約

昨年の大会シンポジウム（雇用流動化と家族）を踏まえ、今年度のシンポジウムでは、「社会的排除と家族」が企画された。報告者はこれまでの家族問題に関する研究の成果を、「社会的排除」という概念で再検討するものであった。その際留意したのは、「家族の多様化・個人化・脱制度化」など、現代の家族の特徴のなかに、貧困と排除のリスクが存在している点を共通認識とするという点であった。神原文子は「ひとり親家族と社会的排除」、南山浩二は「精神障がい者家族と社会的排除」、布川日佐史は「生活保護制度と社会的排除」と題して、家族の諸現象を社会的排除という切り口で報告した。討論者の山崎美貴子は、家族は家族外のケアシステムによってバックアップされることを不可欠として成り立つものであることに注意を喚起した。

キーワード：社会的排除、家族の多様化、家族の個人化、家族の脱制度化

2007, 家族社会学研究, 18(2): 7-10

Symposium “Social Exclusion and Family”

Shinji Shimizu, Michiko Mayamoto

Abstract

Based on the outcome of last year's symposium ('Fluidity of Employment and Family'), this year's meeting focused on 'Social Exclusion and Family'. The main point of the discussion was to re-examine the existing issues in the field of Family Studies from the perspective of social exclusion. One of the notions that drew particular attention was how social exclusion and poverty could be a result of rapidly changing family structure. Diversifying and unconventional structures and individualisation of family members can all be a potential element that could lead to the problems. The proceedings focused on this aspect were: 'One Parent Family and Social Exclusion' by Fumiko Kanbara, 'Families with the Mentally Disabled and Social Exclusion' by Koji Minamiyama and 'Welfare System and Social Exclusion' by Hisashi Fukawa. Mikiko Yamazaki pointed out that in modern society, welfare and other social systems are essential for the family to function as the basic unit of society.

Key words: social exclusion, diversifying family structures, individualisation of family members, unconventional families

2007, Japanese Journal of Family Sociology, 18(2): 7-10

1. 企画の趣旨とその背景

昨年の大会シンポジウムは、「雇用流動化と家族」をテーマに、近年の雇用流動化が家族に与える影響を、若者と女性に焦点を当てて検討した。その結果、大企業男性正社員（中核層）は厳然として存在し続ける一方で、非中核層（中小企業、不安定就労層、女性）は、多層化・断片化しつつあることが明らかになった。これらの議論から、雇用流動化が家族生活に与えるインパクトは何かを議論した。その結果、グローバル経済競争の激化やIT化のなかで、人々の社会的標準を保障するこれまでの諸システム間に齟齬が生じつつあり、その過程で種々の条件から、特に不利な立場に置かれる集団が生まれつつあることに、警鐘が鳴らされた。そこで検討された諸現象は、社会の二極化につながるという認識から、もう一步掘り下げた議論をする必要があるとの検討結果から、今年度のシンポジウムでは、「社会的排除と家族」が企画された。

ところで、近年複数の学会が「社会的排除」を取り上げて検討する動きがあるが、家族社会学会においては扱い慣れない概念である。それを家族研究に適用したとき、どのような議論が可能であるのかを試みようという企画は、実際には報告者にとっても司会者にとってもチャレンジであった。社会的排除という概念は本格的には1980年代に欧州で現れ、近年広く使われるようになっていくが、社会的背景として次の4点が挙げられている。①グローバル経済化、②失業、非自発的なパートタイム労働、有期限雇用契約、一時的労働が増加するなど、労働市場のフレキシブル化、③戦後の西欧型社会モデルが弱体化・崩壊し、それまでの雇用保障、所得再分配制度を維持できなくなるなど、福祉国家路線の崩壊、④自己責任論の台頭の4点である（A.S.バラ/F.ラベール著『グローバル化と社会的排除』昭和堂）。これらの進行過程で、社会的排除が顕在化したと認識されている。

報告者は各テーマの背景として上記の点を共通認識として踏まえながら、これまでの家族問題に関する研究の成果を、再度、「社会的排除」というテーマで再検討するというスタンスで報告することにした。その際留意したのは、社会的排除という切り口で家族を扱う際に、「家族の多様化・個人化・脱制度化」など、ポスト工業化社会、あるいはポスト近代の家族の特徴のなかに、貧困と排除のリスクが存在している点を共通認識とするという点であった。家族の多様化、個人化、脱制度化は、一方で自由を拡大し、平等化をもたらすが、その逆のベクトルも生み出している。例えば、①結婚できない人々（若年者、中高年シングルの増加、身内のない高齢者）、②離婚・家族離散、③放置・遺棄（例えば養護施設の子ども、遺棄老人）、④家族はあっても生活保障のユニットとして機能しない家族などの現象である。これらの現象は、日本経済が悪化した1990年代以降の、社会的格差拡大傾向の中に色濃く見られるもので、グローバル化する経済競争の下での雇用流動化、福祉切捨て、差別などと密接に関連しているものと思われる。

2. 報告の内容

シンポジウムの前半では、神原文子氏（神戸学院大学）に「ひとり親家族と社会的排除」、南山浩二氏（静岡大学）に「精神障がい者家族と社会的排除」、布川日佐史氏（静岡大学）に「生活保護制度と社会的排除」と題する報告をしていただいた。

3人の報告者のテーマは、昨年のシンポジウムが放った視点を受け継ぎつつ、社会経済的システムの急速な変容が家族にどのような影響を及ぼしているかとの問いを、「社会的排除」の概念をベースに据えて、雇用や生活保障問題に限定せず、もう少し広い間口から家族の生活実態に即しつつ問い直そうとするものであった。

第1報告（神原文子）では、ひとり親家族が生活困難状況にある事実は従前から周知の事柄であ

るにもかかわらず、その実際については研究者も行政もほとんど真摯な関心を示さずにきたとの反省から、その生活困難状況について NFRJ や大阪市の資料分析に基づいて詳細なデータ提示がなされ、子どもの養教育ニーズと世帯経済の維持のためのフルタイム（的）就労の狭間で、なお低く苦しい家庭経済にある実状が明らかにされた。誰が何のためにひとり親家族を排除するのかという根源的問いを発しつつ、国家体制にまで及ぶ社会的排除の構図が提示され、反転してひとり親家族を社会的に包摂するための具体的政策課題についても言及がなされた。

第2報告（南山浩二）では、社会経済的变化はもちろんのこと、1990年代からの精神医療政策の急激な動きは、従来からの社会的入院問題＝家族による精神障がい者の排除機制を可視化させた。その一方で、精神障がい者の地域生活の受け皿が家族に過度に期待されるだけなら、家族による過剰な保護と管理を生み、結果的に障がい者の生活自立をはばんでしまう危険性があることが説明された。さらにケアする側の家族も生活困難やストレスにさらされるだけでなく、社会的偏見やスティグマにより家族関係の内閉化、社会的孤立のなかで社会的周辺に追いやられてしまうという排除構造が指摘された。そのうえで、この二つの社会的排除機制をどう無効化するかの方策にも論が及んだ。

第3報告（布川日佐史）では、現代日本の相対的貧困問題は、社会制度からの排除による貧困現象、制度に乗ることでむしろ社会的に排除される構造、地域社会が多様化する中で相互に排除し合い排除がつくられていく構造など、複層的な視点から捉えられることが指摘され、丁寧に生活保護制度の現況と問題点、課題が説明された。特に日本社会の基幹的セーフティネットとなるべき生活保護制度が、急速な社会システム変容に伴い生じている相対的貧困問題に対して、有効に機能していない実状が各種の例を挙げて指摘され、最低生活費の保障のみならず、居住、養育や教育、雇用、

社会参加の保障も含めた、金銭給付と対人援助サービス給付のセットによる保障や、家族を介しない自立支援が肝要だと強調された。この他「自立」の中身をどう捉えておくのかの重要性にも触れ、就労支援に加えて、日常生活、社会生活への支援も視野に入れた自立支援が求められていることが指摘された。

3. 討論

シンポジウムの後半では、コメンテーターの山崎美貴子氏（神奈川県立保健福祉大学）に問題提起をしていただき、会場からの質問も合わせて討論を行った。

山崎美貴子氏は、各報告の重要な論点を再確認しつつ、家族の多様化、個人化が進行する現在ではもとより、元来近代の家族は家族外のケアシステムによってバックアップされることを不可欠として成り立つものであることに注意を喚起し、ケアの外部化が極めて重要であることを強調された。各報告者が触れたように、家族の個人化動向が排除される人びとの自立を妨げたり、家族が排除のエージェントになったり、あるいは家族を介しない自立支援のニーズなどを勘案するとき、多次元にわたる相対的貧困に向き合うヒューマンサービスが、市民的ネットワークも含めてケアの家族外部化の視点から検討されるべきだとの考えを述べ、その指針的概念として「ソーシャル・キャピタル」が有効であることも示された。

4. まとめ

本年のテーマは、昨年のシンポジウムに続いて久方ぶりに、マクロな社会の動態とミクロな家族の現象をリンクして議論する試みであった。なにぶんにも蓄積の浅いテーマであるために、報告者の人選の段階から難航したが、問題の時宜性、切り口の新鮮さなどから、そしてシンポジウムの趣旨を的確に受け止めていただいた報告者、コメンテーターの内容のある報告によって、多くの参加者を得たうえおおむね好評を博するシンポジウム

となった。

最後に二つの点をまとめておきたい。一つ目は、現代社会のメカニズムは、例えばひとり親、障がい、生活保護世帯には該当しない「普通の人々」にとっても、社会的排除が無縁のものとはいえなくなっていることである。家族の多様化・個人化・脱制度化、あるいはグローバリゼーション、雇用の流動化、自己責任と福祉見直しなど、近年急速に広がった社会状況は、社会参加からの相対的剥奪、貧困と排除のリスクを一般化している。三つの報告は、これらの現象に対しても、なにがしかの光を当てられればとの意図を併せもっていたと思われる。今後ともこうした現象を

解く多くの研究が生まれる必要があろう。

二つ目は、社会的排除という概念が従来の貧困概念と区別されるのは、貧困の静止的状态よりも、排除される動的プロセスを問題にしているという点である。そこには、ライフコースにおけるライフチャンスを保障し、社会的包摂を果たそうとする問題意識がある。その点に着目した家族研究の展開が望まれる。

このシンポジウムは、いろいろな刺激と示唆に富むものであったと同時に、今後より多くの会員の多様な問題意識と関連づけられて展開されることを期待したい。